宮城県文化財調査報告書第117集

七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ

# 小梁川遺跡

## 遺物包含層土器編

原 頭 遺 跡
養 源 寺 跡
大熊南遺跡

昭 和 61 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
建設省七ヶ宿ダム工事事務所

# 序

七ヶ宿ダムは、建設省東北地方建設局が水源地域対策特別措置法に拠り、七ヶ宿町字橋場・字切通の地に白石川の流水を堪え、流水の正常な機能維持と洪水調節を図るとともに、農業用水、上水用水、工業用水の潤沢な供給を目的に計画した宮城県内最後の大規模多目的ダムである。

このダムの建設によって「山中七ヶ宿」の一部として交通史上に大きな役割を果した宿場渡瀬・原・追見の3集落の民家150戸と410haの土地が水面下にその姿を没することになった。

また、「材木岩と虎岩」、「よこぐらの木」の分布地はさけられたものの小梁川遺跡など10数遺跡が水没あるいは付帯工事等により記録保存を余儀なくされた。

協議によって、調査は昭和55年度末に準備に入り、昭和56年度から本格的に開始された。当初、遺跡の箇所数が多く面積も広大なことから、調査は長期化するのではないかと考えられたが、建設省東北地方建設局七ヶ宿ダム工事事務所と七ヶ宿町教育委員会、白石市教育委員会など関係当局の誠意ある御協力をいただいたことと調査方法に工夫を重ねたことなどにより順調な進捗を示した。昭和59年度で大部分の野外調査を終わり、昭和60年度残りの養源寺跡の調査でもってほぼ完了した。昭和56年の冬から基礎的遺物整理に入り昭和59年度には調査報告書第1冊目を刊行した。今年度は本格的な遺物整理に入り、この度、小梁川遺跡遺物包含層(石器を除く)と原頭遺跡などを調査報告書の第2冊目として刊行する運びになった。

ここに本書の刊行に際し御協力を賜った関係各位に対し改めて深甚なる感謝の意を表わすとともに、本書が学術研究並びに社会教育・学校教育の資料として活用されるよう願うものである。

昭 和 61 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
教 育 長　郷 古 康 郎

# 例　　言

1．本書は七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書第２冊目として、小梁川遺跡（遺物包含層土器編）・原頭遺跡・養源寺跡（以上七ヶ宿町）と大熊南遺跡（白石市）の調査成果をまとめたものである。

2．調査の主体者は、宮城県教育委員会と建設省東北地方建設局（七ヶ宿ダム工事事務所）である。

3．発掘調査及び遺物整理については、次の方々から御教示と御指導を賜った。
東北学院大学文学部伊東信雄氏，東北福祉大学芹沢長介氏，東北大学文学部須藤　隆氏，
東北大学農学部星川清親氏，濁協医科大学茂原信生氏，名古屋大学文学部渡辺　誠氏，
福島県文化センター目黒吉明氏，東北歴史資料館岡村道雄氏，
志間奏治氏，後藤勝彦氏，古山安紘氏，秦　昭繁氏，松島吉信氏，山田晃弘氏

4．土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を、土性区分は国際土壌学会法の基準を参照したものである。

5．地形図は建設省国土地理院発行の2.5万分の１地形図〈白石南部〉〈関〉を使用した。

6．上記各遺跡の出土遺物及び実測図・写真等の資料は、宮城県教育委員会が保管している。

7．遺物整理・報告書の作成は、宮城県教育庁文化財保護課が担当し、各遺跡の整理・執筆は課員の検討を経て、次のとおり分担して行った。
(1)小梁川遺跡　Ⅰ新庄屋元晴、Ⅱ-1平沢英二郎、Ⅱ-2村田晃一、
Ⅲ相原淳一、Ⅳ相原淳一、
Ⅴ相原淳一、Ⅵ新庄屋元晴、
Ⅶ-1茂原信生、Ⅶ-2星川清規
(2)原頭遺跡　村田晃一
(3)養源寺跡　小川　出
(4)大熊南遺跡　平沢英二郎

(1)　南から見た小梁川遺跡

(2)　北から見た板沢地区

(1)　CL74区　第6層

(2)　CQ88区　第7層上面

(3)　CN87区　第4層

(4)　CN89区　第5層上面

原色図版四　遺物包含層出土土製品

(1)　土　偶

(2)　土偶・三脚形土製品・耳飾り

# 目　　次

## (1) 小梁川遺跡


Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 3
　1．位置と地形環境 …… 3
　2．周辺の遺跡 …… 5
Ⅱ．調査の方法と経過 …… 11
　1．七ヶ宿ダム関連遺跡調査に至る経過 …… 11
　2．調査の方法と経過 …… 12
Ⅲ．基本層位と遺物包含層層位 …… 17
　1．基本層位 …… 17
　2．遺物包含層層位 …… 19
Ⅳ．東側遺物包含層 …… 23
　1．出土土器 …… 23
　　(1) 72 列 …… 24
　　(2) 73 列 …… 55
　　(3) 86 列 …… 74
　　(4) 87 列 …… 137
　　(5) 61 列 …… 191
　　(6) 67 列 …… 193
　　(7) 68 列 …… 195
　　(8) 69 列 …… 195
　　(9) 70 列 …… 201
　　(10) 71 列 …… 216
　　(11) 74 列 …… 228
　　(12) 75 列 …… 236
　　(13) 76 列 …… 247
　　(14) 77 列 …… 249
　　(15) 78 列 …… 251
　　(16) 79 列 …… 253

(17) 80 列 …… 258
(18) 81 列 …… 266
(19) 82 列 …… 270
(20) 83 列 …… 279
(21) 84 列 …… 295
(22) 85 列 …… 330
(23) 88 列 …… 378
(24) 89 列 …… 452
(25) 90 列 …… 511
2. 考　　察 …… 525
a. 東側遺物包含層出土土器の分類 …… 525
b. 東側遺物包含層出土土器の共伴関係 …… 578
c. 土器群の編年的位置と地域性について …… 582
d. 土器組成の推移について …… 603
e. 土器の使用について …… 605
Ⅴ. 西側遺物包含層 …… 609
1. 出土土器 …… 609
2. 土器の編年的位置 …… 611
Ⅵ. 土製品 …… 625
1. 土　偶 …… 625
2. 三脚形土製品 …… 628
3. 耳飾り …… 629
4. 円盤状土製品 …… 629
5. 不明土製品、岩製品 …… 631
Ⅶ. 付編 …… 643
1. 小梁川遺跡出土の人骨および獣骨 …… 643
2. 縄文土器面の“小穴”についての調査報告 …… 653
Ⅷ. まとめ・引用参考文献 …… 669
写真図版 …… 675

**(2) 原明遺跡**

Ⅰ．遺跡の立地 …… 899
Ⅱ．調査の方法と経過 …… 899
Ⅲ．調査の成果 …… 901
1、基本層位 …… 901
2、発見された遺構と遺物 …… 901
(1)　竪穴遺構とその出土遺物 …… 901
(2)　遺構以外の出土遺物 …… 903
Ⅳ．考　察 …… 920
Ⅴ．まとめ …… 923
引用・参考文献 …… 923
写真図版 …… 925

**(3) 養源寺跡**

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 935
Ⅱ　遺跡の調査 …… 936
引用・参考文献 …… 936
写真図版 …… 937

**(4) 大熊南遺跡**

Ⅰ．遺跡の立地 …… 941
Ⅱ．調査の方法と経過 …… 941
Ⅲ．調査の成果 …… 941
1．土器 …… 941
2．石器 …… 941
Ⅳ．まとめ …… 942
写真図版 …… 943

# (1) 小 梁 川 遺 跡

# 調　査　要　項

遺跡記号；ＪＣ（宮城県遺跡地名表登載番号 04032）

遺跡所在地；宮城県刈田郡七ヶ宿町小梁川，板沢，白ハゲ地内

調査期間；昭和 56 年 4 月 21 日～10 月 31 日

昭和 57 年 4 月 8 日～11 月 2 日

調査主体者；宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局七ヶ宿ダム工事事務所

調査担当者；宮城県教育庁文化財保護課

調査対象面積・調査面積；約 48,000 ㎡

調査員；昭和 56 年度発掘調査　佐々木茂槙・新庄屋元晴・加藤道男・真山悟・菊地淳一・小徳晶・相原淳一

昭和 55 年度遺物整理　佐々木茂槙・新庄屋元晴・真山悟・菊地淳一・相原淳一

昭和 57 年度発掘調査　佐々木茂槙・新庄屋元晴・真山悟・菊地淳一・相原淳一・村田晃一

昭和 57 年度遺物整理　佐々木茂槙・新庄屋元晴・真山悟・菊地淳一・相原淳一

昭和 58 年度遺物整理　平沢英二郎・菊地淳一・相原淳一

昭和 59 年度遺物整理　平沢英二郎・相原淳一・村田晃一

昭和 60 年度遺物整理　平沢英二郎・新庄屋元晴・相原淳一・小川出・村田晃一

# Ⅰ．遺跡の位置と環境

# Ⅰ．遺跡の位置と環境

## １．位置と地形環境

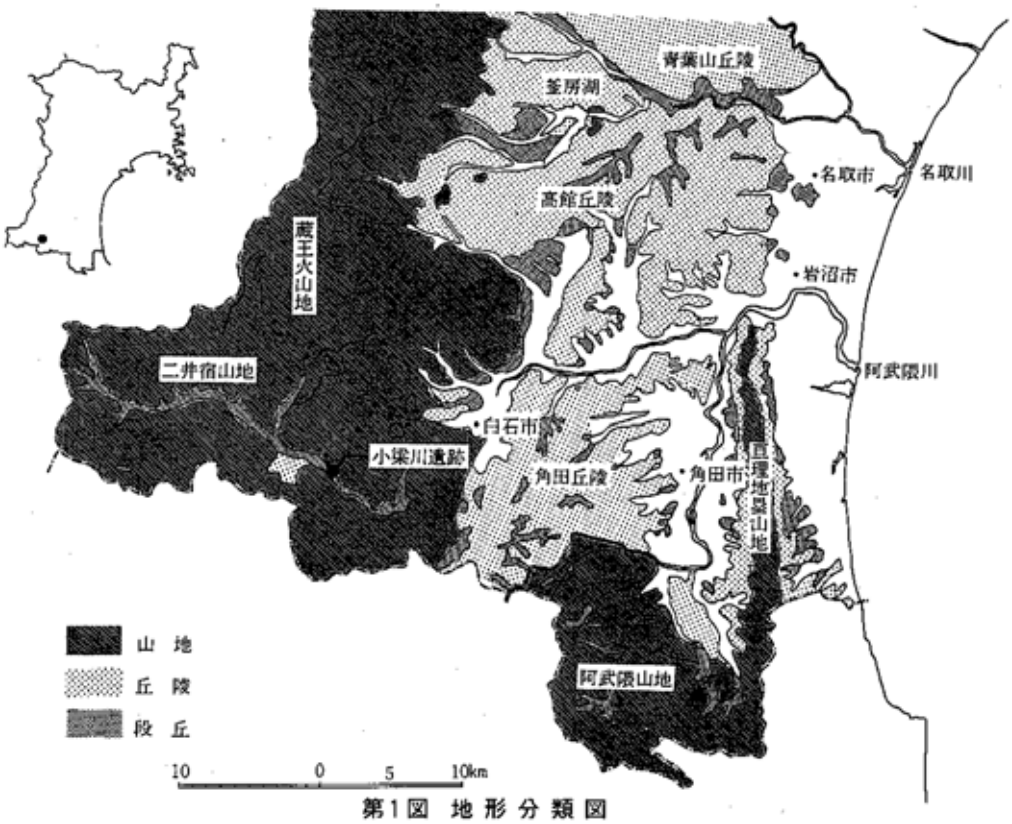
小梁川遺跡は、刈田郡七ヶ宿町字小梁川・字板沢・字白ハゲに所在し、七ヶ宿町役場の所在する関から東方へ約５キロメートルの地点に位置する。

本遺跡の所在する七ヶ宿町は、宮城県の南西端にあたり、西は山形県、南は福島県に隣接し、宮城県の西側県境を南北に走る奥羽山地の中の二井宿山地内に属している。

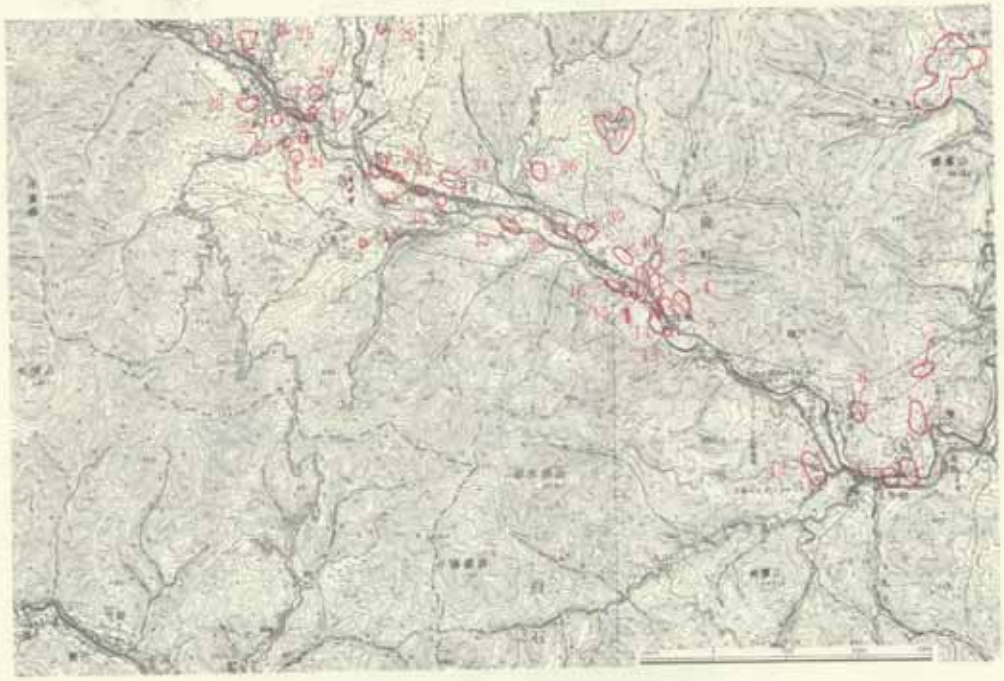
七ヶ宿町周辺の地形を概観すると、二井宿山地の北は、蔵王火山地となり、東は、北から高館丘陵が、南から角田丘陵が樹枝状に広がっている。角田丘陵の東には、阿武隈山地の一部が北に伸びた亘理地塁山地があり、その東は、亘理海岸平野を経て太平洋となっている。

これらの丘陵や山地の間には、白石低地、円田盆地、村田盆地、槻木低地、角田盆地が形成されている。

七ヶ宿町内のほぼ中央を流れる白石川は、山形県境（金山峠付近）に端を発し、茂沢、大深沢、横川、大梁川、小梁川などの小河川を集めて蛇行しながら東流し、川沿いは、段丘崖の発達した段丘平坦面や小規模な扇状地及び崖錐からなる狭長な山間盆地（七ヶ宿盆地）となって




第１図　地形分類図



| 番号 | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 小梁川遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文(早・前・中・後)・平安 | 21 | 東島田原遺跡 | 丘陵 | 包含地 | 縄文(中) |
| 2 | 若林山遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文(前・中) | 22 | 内川B遺跡 | 丘陵 | 包含地 | 縄文 |
| 3 | 小梁川東遺跡 | 丘陵麓 | 包含地 | 弥生(?)・縄文(早・中・後・晩)・平安 | 23 | 八幡館跡 | 丘陵 | 城館 | 中世 |
| 4 | 野沢倉山遺跡 | 丘陵 | 包含地 | 縄文(中) | 24 | 神林A遺跡 | 丘陵斜面 | 包含地 | 縄文(中・晩) |
| 5 | 大倉遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文(早・前) | 25 | 神林B遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文 |
| 6 | 冷清水遺跡 | 丘陵 | 城館? | 中世? | 26 | 長下遺跡 | 丘陵麓 | 包含地 | 縄文(中) |
| 7 | 小久保平遺跡 | 丘陵斜面 | 包含地 | 縄文(早・前・中・後)・弥生・平安 | 27 | 内川遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文(晩) |
| 8 | 高館跡 | 丘陵麓 | 城館 | 中世 | 28 | 宮田遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文(後) |
| 9 | 大鳥館跡 | 丘陵 | 城館 | 中世 | 29 | 大原遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文(中・晩) |
| 10 | 矢越遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文(後)弥生 | 30 | 矢立西遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文(早・中・後) |
| 11 | 大鳥南遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文(早・前・後) | 31 | 夏梨平遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文(早・前) |
| 12 | 六角館跡 | 丘陵 | 城館 | 中世 | 32 | 矢立遺跡 | 河岸段丘 | 包含地 | 縄文 |
| 13 | 興源寺跡 | 段丘 | 寺院跡 | 縄文・中世 | 33 | 上道見遺跡 | 河岸段丘 | 包含地 | 縄文 |
| 14 | 道端遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文(早・前・中・後・晩)・弥生 | 34 | 根添遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文・奈良・平安 |
| 15 | 原尻遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文(早・中) | 35 | 町頭遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文 |
| 16 | 原遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文 | 36 | 大梁川遺跡 | 丘陵斜面 | 包含地 | 縄文(中・後) |
| 17 | 海老沢遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文 | 37 | 有谷館跡 | 丘陵 | 城館 | 中世 |
| 18 | 大貫平遺跡 | 丘陵斜面 | 包含地 | 縄文(中) | 38 | 原頭遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文(早・前) |
| 19 | 中高瀬遺跡 | 段丘 | 包含地 | 縄文(前・中) | 39 | 原頭東遺跡 | 丘陵 | 包含地 | ? |
| 20 | 土足沢遺跡 | 丘陵斜面 | 包含地 | 縄文 | 40 | 沖遺跡 | 沖積地 | 包含地 | |

第2図　遺跡の位置と周辺の遺跡

いる。白石川は、さらに東流を続け、白石低地、槻木低地を経て、角田盆地の中央を北流する阿武隈川と亘理地塁山地の北端部で合流している。

本遺跡は、二井宿山地の山懐にあり、阿武隈川の一支流白石川の上流左岸に位置し、段丘崖の発達した河岸段丘上に立地している。遺跡の南端は、白石川に面する段丘崖となり、東端は、南流して白石川に合流する小梁川に面する段丘崖となっている。西端は、湿地状に窪む盗人沢によって画され、北側は、標高約 300 メートルの山地が控えている。

遺跡の広がりは、東西約 150 メートル、南北約 300 メートルに及び、総面積は約 48,000 平方メートルになる。

遺跡内は、概ね平坦ではあるが小梁川に面する段丘崖寄りには一段低い平坦面ができており、上位の平坦面と下位の平坦面に大別することができる。遺跡の南寄りには、国道 113 号線が東西に横切っており、道路敷は上位の平坦面を一部削平して一段低くなっている。

遺跡の標高は、高い所で約 270 メートル、低い所で約 260 メートルあり、白石川に面する段丘崖の高さは、約 10 メートルを測る。

## ２．周辺の遺跡

七ヶ宿町内には、現在、古墳時代を除く旧石器時代から中世に至る 78 箇所の遺跡が知られ、この内、縄文時代に属するものは 67 箇所（85.9%）と大半を占めている。いずれも白石川や白石川の支流である横川の川沿いに点在するもので、密度は希薄なものであるが、横川の川沿いには縄文早期の遺跡が集中する傾向にある。

七ヶ宿ダム建設に伴う調査以外で、これまでに発掘調査の実施された遺跡は、七ヶ宿町字関に所在する長下遺跡と同字峠田に所在する峠田遺跡だけである。

長下遺跡は、白石川の右岸、河岸段丘上に立地し、縄文時代中期(大木 8ｂ式期)の埋設土器や土壙などが検出されている（斎藤；1977）。

峠田遺跡は、同じく白石川の右岸、河岸段丘上に立地するが、縄文時代中期（大木 8・10 式期）の土器片を出土するだけで現在のところ遺構の検出は見られない。

ダム建設に伴う湛水域を中心とする遺跡については、その内容が明らかになりつつあるが、その他の遺跡については不明な点も多く、周辺の遺跡については、以下、ダムの湛水域に係る遺跡を中心に概観することにする。

晩期旧石器時代については、本遺跡の東隣り、小梁川の対岸段丘上に小梁川東遺跡（真山・菊地；1985）があり、微隆起線文土器が 1 片出土している。

縄文時代早期の遺跡としては、本遺跡から早期後葉の竪穴１基と共に条痕文土器が出土している他、本遺跡の西隣りの段丘上に原尻遺跡があり、押型文土器・沈線貝殻文土器や縄文条痕土器が出土している。また、早期末葉あるいは前期初頭の遺跡としては、東方約300メートルの段丘上に大倉遺跡（笠原；1985）があり、同時期の住居跡が４軒検出されている。これは、県内では数少ない発見例であり、同期の集落の在り方を知る上で貴重な遺跡といえる。

縄文前期前葉の遺跡としては、本遺跡から同期の住居跡が10軒検出されている他、西方約1.5キロメートルの段丘上に原頭遺跡が、北方に近接して若林山遺跡（今野；1985）がある。共に前期初頭に比定される土器が出土している。

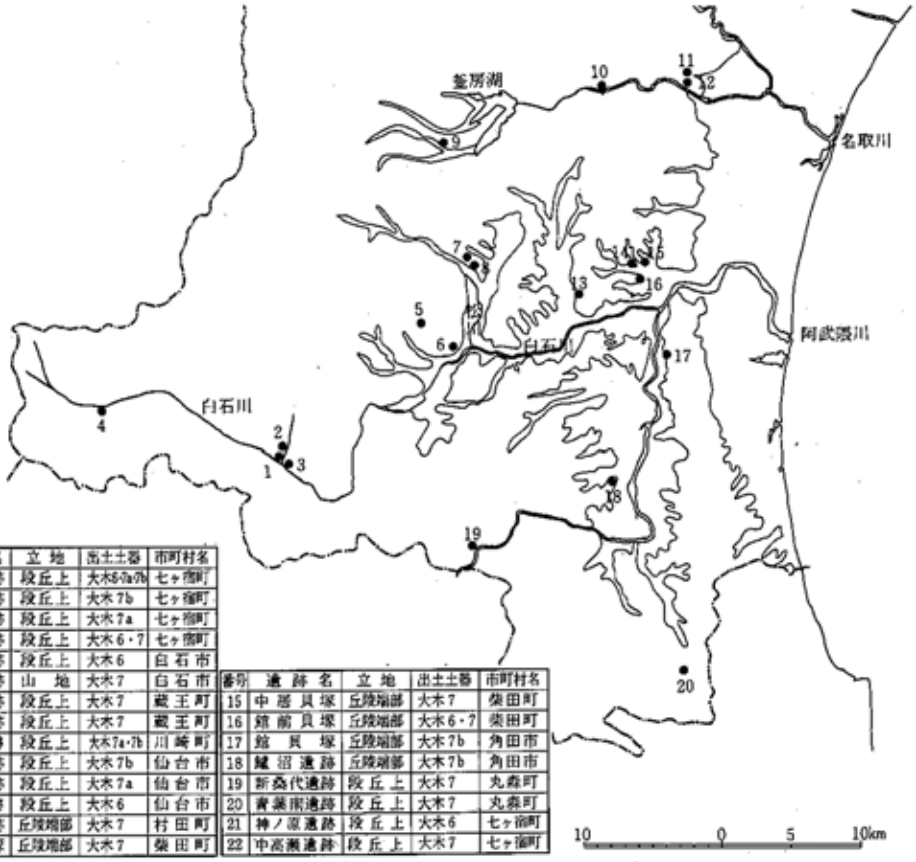
縄文前期末葉から中期前葉の遺跡としては、本遺跡がある。全面発掘調査によって約20,000平方メートルに及ぶ集落の全貌がほぼ明らかとなった。大形住居跡を含む多くの住居跡やフラスコ状土壙、墓壙、遺物包含層などが検出されている。特に、後述する同期の遺物包含層からは、多量の土器類が出土し貴重な資料を提供している。

縄文中期後葉から中期末葉の遺跡としては、小梁川東遺跡から同期の埋設土器や中期末葉の住居跡2軒などが検出されている他、一西方約2キロメートルの山地裾部に大梁川遺跡があり、中期末葉の住居跡11軒などが検出されている。本遺跡の周辺にあっては、前期末葉から中期前葉の時期の本遺跡と比べて遺跡の規模が小さくなり、近接しながら複数の箇所に分散する様相を呈している。

縄文後期から晩期にかけては、まとまった資料に乏しい。付近では後期初頭の土器を出土する小梁川東遺跡や大梁川遺跡がある。中期に比べて出土量も少なく、遺構も小梁川東遺跡から土壙が２基検出されているに過ぎない。晩期については、本遺跡や小梁川東遺跡、道端遺跡（笠原；1985）において表土から若干の土器片が出土するに過ぎず遺構については不明である。

弥生時代から奈良時代にかけての時期については、道端遺跡の表土から弧生時代中期と考えられる数片の土器が出土しただけで、他に該当する明確な遺跡は認められない。ただし、峠田遺跡に近接する儘の上A遺跡からは多頭環状石斧が出土しており、弥生時代遺物として注目されよう。

平安時代の遺跡としては、本遺跡（古代編：新庄屋・真山；1985）と小梁川東遺跡がある。本遺跡からは、住居跡22軒や掘立柱建物跡などが、小梁川東遺跡からは、住居跡６軒や掘立柱建物跡などが検出されている。出土遺物の中には、本遺跡から漆紙文書、墨書土器などが、小梁川東遺跡からも墨書土器などが出土している。これら平安時代の遺構群は、小梁川の両岸に形成された河岸段丘上に位置し、上位の平坦面からは縄文時代の遺構が検出されるのに対し、下位の平坦面から多く検出されている。これら平安時代の遺構は、平安時代でも前半に位置づけられるものであり、それ以後の遺構は検出されていない。




| 番号 | 遺跡名 | 立地 | 出土土器 | 市町村名 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 小梁川遺跡 | 段丘上 | 大木6/7a/7b | 七ヶ宿町 |
| 2 | 若林山遺跡 | 段丘上 | 大木7b | 七ヶ宿町 |
| 3 | 道端遺跡 | 段丘上 | 大木7a | 七ヶ宿町 |
| 4 | 上ノ台遺跡 | 段丘上 | 大木6・7 | 七ヶ宿町 |
| 5 | 正入壇遺跡 | 段丘上 | 大木6 | 白石市 |
| 6 | 別当地遺跡 | 山地 | 大木7 | 白石市 |
| 7 | 曲木遺跡 | 段丘上 | 大木7 | 蔵王町 |
| 8 | 西裏遺跡 | 段丘上 | 大木7 | 蔵王町 |
| 9 | 中ノ内A遺跡 | 段丘上 | 大木7a・7b | 川崎町 |
| 10 | 川添東遺跡 | 段丘上 | 大木7b | 仙台市 |
| 11 | 北前遺跡 | 段丘上 | 大木7a | 仙台市 |
| 12 | 山田上ノ台遺跡 | 段丘上 | 大木6 | 仙台市 |
| 13 | 奥野山遺跡 | 丘陵端部 | 大木7 | 村田町 |
| 14 | 深町貝塚 | 丘陵端部 | 大木7 | 柴田町 |
| 15 | 中居貝塚 | 丘陵端部 | 大木7 | 柴田町 |
| 16 | 館前貝塚 | 丘陵端部 | 大木6・7 | 柴田町 |
| 17 | 館貝塚 | 丘陵端部 | 大木7b | 角田市 |
| 18 | 鍵沼遺跡 | 丘陵端部 | 大木7b | 角田市 |
| 19 | 新桑代遺跡 | 段丘上 | 大木7 | 丸森町 |
| 20 | 青葉南遺跡 | 段丘上 | 大木7 | 丸森町 |
| 21 | 神ノ原遺跡 | 段丘上 | 大木6 | 七ヶ宿町 |
| 22 | 中高瀬遺跡 | 段丘上 | 大木7 | 七ヶ宿町 |

第３図　縄文前期末葉～中期前葉の遺跡分布図

中世の遺跡としては、北方約２キロメートルの山地内に有谷館が、南東約３キロメートルの山地内に大熊館などがあり、近接地では東方約１キロメートルの段丘上に養源寺跡がある。

近世には、福島県の桑折から山形県の高畠に通じる七ヶ宿街道（羽州街道の一部）沿いとなり、現在、白石市内に属する上戸沢、下戸沢と本町内に属する渡瀬、関、滑津、峠田、湯の原の七つの宿駅が栄えた。本町の町名「七ヶ宿」は、このことに由来している。ダム建設に伴い七つの宿駅の一つ渡瀬集落も水没するが、水没地内の集落については別に「ダム下に沈む七ヶ宿街道集落の調査記録」（佐藤；1981）がある。

次に、本遺跡の遺物包含層の主たる時期である縄文前期末葉（大木６式期）から縄文中期前葉（大木７ａ・７ｂ式期）にかけての県南部における遺跡の分布を見ることにする（第３図）。

現在、本遺跡も含めて合計 22 箇所が知られている。いずれも低地に立地するものはなく、段丘上や丘陵の端部、山地内に立地している。遺跡の分布は、柴田町内の貝塚及び白石市内の白石川の一支流松川の左岸河岸段丘上と仙台市内の名取川の左岸河岸段丘上に一部近接する遺跡がある他は全体的に遺跡間の距離が大きく隔たる傾向を見せ、分布密度は希薄なものである（第

3 図）。このことは、当時の集落の在り方の一端を示すものと考えられる。白石川水系においては、本遺跡の周辺を含めて計 3 箇所の集落集中地区が存在し、本遺跡は山間部の集落であり柴田町内の貝塚は海岸部寄りの沖積地に面する集落である。松川の左岸段丘上の集落はその中間部に位置する集落と言えよう。これら比較的大規模な集落の他には小規模な集落が点在するといった遺跡のあり方が考えられる。

# Ⅱ. 調 査 の 方 法 と 経 過

## １．七ヶ宿ダム関連遺跡調査に至る経過

七ヶ宿ダムは、阿武隈川水系白石川の宮城県刈田郡七ヶ宿町字橋場及び字切通地区に洪水調節、流水の正常な機能の維持並びに農業用水、水道用水及び工業用水の供給を目的として建設される多目的ダムである。

昭和 50 年 9 月、宮城県教育委員会は、七ヶ宿ダム建設に伴う水没地の埋蔵文化財の保護をめぐり建設省東北地方建設局に協議した。

昭和 50 年 12 月、七ヶ宿ダム工事事務所長は、七ヶ宿ダム建設地域内の埋蔵文化財の所在、規模、内容等について七ヶ宿町教育委員会を経由して宮城県教育委員会に協議した。これに基づいて、昭和 51 年 5 月 26 日～27 日、七ヶ宿町教育委員会の協力を得て分布調査し、これまで周知の遺跡としてきた小梁川遺跡、小梁川東遺跡、大梁川遺跡のほか新たに烏川岳遺跡が発見されたことを含めて、昭和 51 年 6 月 2 月付け、文第 128 号で回答した。

さらに、昭和 53 年 4 月、ダム建設に伴い一部水没する一般国道 113 号の付替道路計画に伴う関係地域の文化財等の調査依頼があり、昭和 53 年 5 月 15 日から 5 月 18 日まで分布調査を実施した。その結果について、昭和 53 年 6 月 26 目付け、文第 114 号で回答した。この調査で、新たに矢立西遺跡、大熊南遺跡などを追加することになった。また、このときダム水没地域で再度の分布調査が必要な旨を建設省七ヶ宿ダム工事事務所に連絡した。

昭和 54 年 10 月と昭和 55 年 8 月の二回にわたり七ヶ宿工事事務所長は、ダム建設に伴う埋蔵文化財の分布及び発掘調査について七ヶ宿町教育委員会、白石市教育委員会と宮城県教育委員会に協議した。

昭和 55 年 11 月 18 日付け、文第 639 号で宮城県教育委員会は、七ヶ宿ダム建設事業に伴う埋蔵文化財の予備調査を実施する旨建設省側と七ヶ宿町、白石市教育委員会に通知した。

昭和 55 年 11 月～12 月、最終の詳細な分布調査を実施し、その結果、18 遺跡約 385000 ㎡が調査対象であることを七ヶ宿ダム工事事務所長に通知した。

この頃になると、用地等の買収の見通しがつき、発掘調査の支障が徐々にとり払われ始めた。

昭和 56 年 3 月上旬発掘調査の諸準備に着手した。下旬には発掘調査現場事務所も設営した。

昭和 56 年 4 月 7 日、発掘調査の地区設定に入り、4 月 13 日に作業員を正式に雇用し、重機も稼働し、調査は軌道にのり大きく動きだした。

昭和 56 年度から 59 年度まで野外調査の大部分を終了し、60 年に用地の解決をみた養源寺跡の調査を実施した。基礎的遺物整理は 56 年度から実施しているが、本格的遺物整理は 59 年からで 60 年 3 月に小梁川東遺跡ほか 5 遺跡を収録した「七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ」を刊行した。今回、調査遺跡中遺物量の一番大きい小梁川遺跡縄文時代遺物包含層の土器編についてとりまとめができたので第 2 冊目として報告するものである。

## ２．調査の方法と経過

小梁川遺跡はこれまでの分布調査等による表採資料から縄文時代中期及び晩期に属する面積約 48,000 ㎡の遺跡と考えられてきた。発掘調査は七ヶ宿ダムの建設によって遺跡が水没し、またダム建設に伴う各種の工事で遺跡の現状変更が余儀ない状況となったため、遺跡全域を調査し、その結果を記録にとどめることを目的として行われた。

### (1)　調査区の設定

調査区の設定は総面積 410 万㎡におよぶダム湛水域全体を国家座標に準拠した 300m四方の大グリッドで区画し、さらに個々の大グリッド内を 3m四方の小グリッドで細分した。そして大グリッドを東西方向－アルファベット、南北方向－ローマ数字、小グリッドを東西方向－アルファベット 2 文字の組み合わせ、南北方向－アラビア数字であらわし、その名称は大小ともそれぞれの組み合わせで呼んでいる。

### (2)　調査の方法

発掘調査は土層観察用のベルトを残して表土を重機で除去し、その後ケズリをかけて遺構確認作業を行った。その結果、遺跡の面積は約 48,000 ㎡で板沢地区と白ハゲ地区の双方に縄文時代の遺構が、板沢地区の北東斜面と白ハゲ地区の東半部で平安時代以後の遺構が検出された。遺構以外からの出土遺物は遺物カードに日付、グリッド名、層位名を記入して取り上げ、遺構はプラン確認後ベルトをかけて精査し、1/20 断面図を作成した。遺構からの出土遺物は層位毎に取り上げ、完掘後は遺り方に基づいて 1/20 平面図を作り、レベルを記入した。また、この際必要に応じて精査の補足作業を実施している。遺物包含層はグリッド毎にベルトを残して精査し、出土遺物は層位毎に取り上げていった。ベルトの部分は全グリッド精査後調査員によって包含層全体の層の検討を行い、1/20 断面図を作成して取りはずした。写真撮影は 35 ミリ版モノクロ、35 ミリ版カラーリバーサル（スライド用）、4×5 インチ版モノクロを用い、発掘の諸段階にあわせて行った。

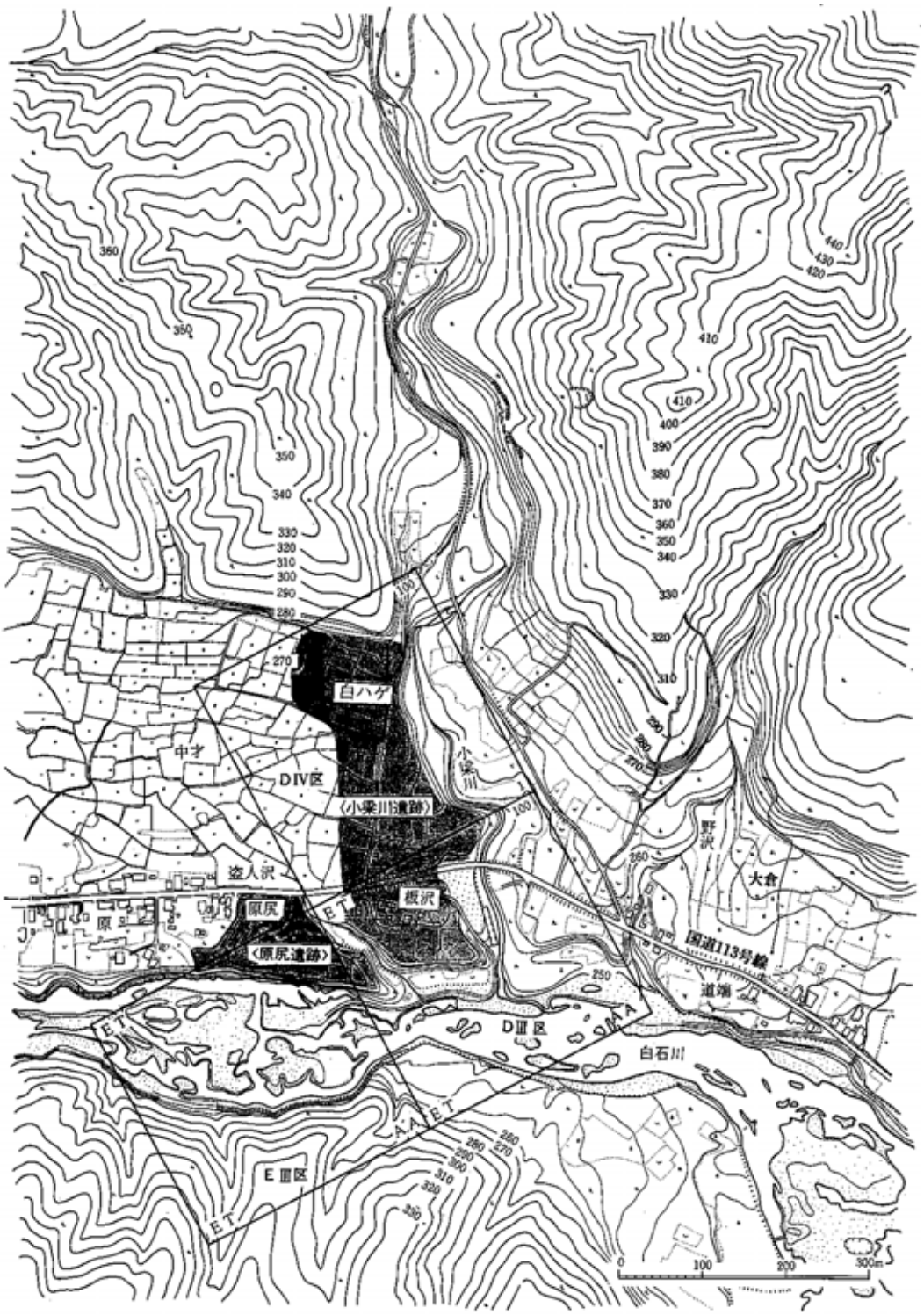
### (3)　調査の経過

発掘調査は遺跡全域を対象とし、地元各地区から作業員の協力を得て昭和 56 年より開始され、翌昭和 57 年に終了している。

2 年にわたる調査の概要は以下の通りである。

**第１次調査**（昭和 56 年 4 月 21 日～昭和 56 年 10 月 31 日）

調査の開始は昭和 56 年 4 月 21 日で、対象としたのは板沢地区の南半部と白ハゲ地区の南西部及び道路敷を除く部分である。4 月～8 月中旬までは主として縄文時代の遺構の精査と東側遺物包含層南部の精査を行った。その後古代の遺構精査に移り、9 月下旬からはこれと併行して




第４図　周辺の地形と調査区

遣り方設定、1/20 平面図の作成、写真撮影等を行い、10 月 31 日に調査を終了した。発掘面積は約 37,000 ㎡で、10 月 17 日には調査成果の公開を図るため現地説明会をひらいている。

**第 2 次調査**（昭和 57 年 4 月 8 日～昭和 57 年 11 月 2 日）

調査は1次調査で残した板沢地区の北半部と白ハゲ地区の南西部及び道路敷を対象に昭和57年 4 月 8 日から開始した。遺構確認作業は臨接する小梁川東遺跡とともに進められ、精査は遺構が 6 月 23 日～11 月 2 日、東側遺物包含層北部が 5 月 26 日～11 月 1 日、西側遺物包含層が 9 月上旬に行われた。8 月下旬からはこれと併行して遣り方設定、1/20 平面図作成、写真撮影等を行い、11 月 2 日に調査を終了した。発掘面積は約 11,000 ㎡で、調査が一段落した 10 月 16 日には現地説明会をひらいている。

**(4)　縄文時代の遺構の分布状況**

付図 1 は板沢地区、付図 2 は白ハゲ地区の遺構配置図である。これを見ると縄文時代の遺構は全て上位の段丘面で検出されているが、その分布には粗密があり、板沢地区の東部・北部・西部及び白ハゲ地区の南部は前期前葉と前期末葉～中期中葉までの住居跡・土壙・ピットなど多くの遺構が確認され、板沢地区では遺構群のさらに東側の段丘崖と北西斜面に前期末葉～中期前葉の遺物包含層が形成されている。これに対し、板沢地区の中央部から南側には遺構が少なく、白ハゲ地区でも南部を除けば全体的に遺構の密度は稀薄で、僅かに西側斜面で長軸方向が尾根線に直交する溝状の土壙が南北に並ぶのと、その北端に早期末葉～前期初頭の住居跡や付近の尾根上に中期中葉の住居跡が認められるだけである。

# Ⅲ. 基本層位と遺物包含層層位

# Ⅲ. 基本層位と遺物包含層層位

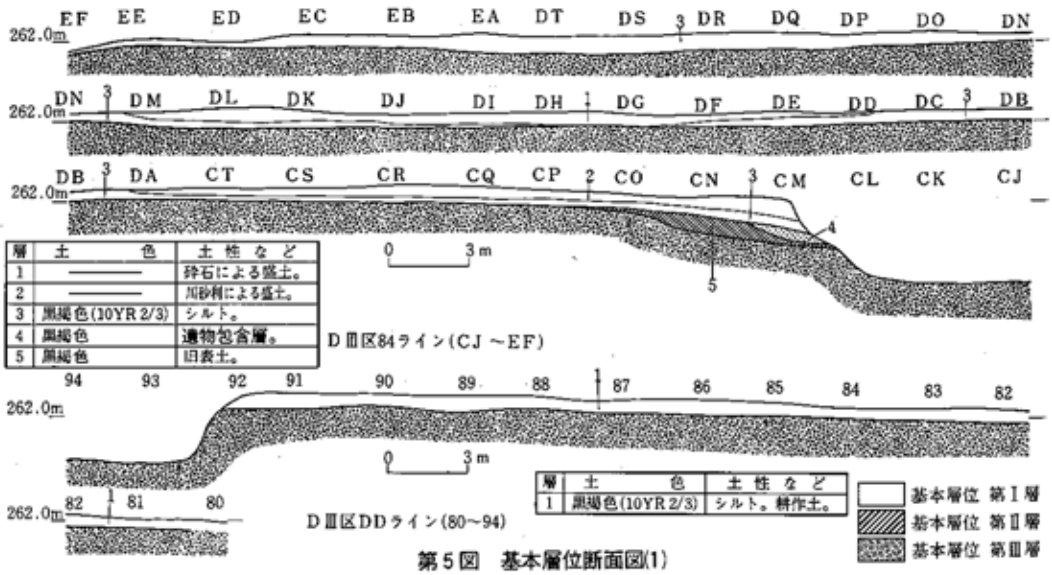
## １．基本層位

今回、報告の対象とする遺物包含層は、遺跡の南半にあたる「板沢」地区の表土下で発見された。同地区では、表土から地山に至る３枚の層が確認され、上部から各々第Ⅰ層・第Ⅱ層・第Ⅲ層と命名された。以下に各層の状況について、概略を述べる。

基本層位第Ⅰ層；表土・耕作土である。シルトで構成される層で、間隙性があり柔らかい。全体的な色調は黒褐色である。桑園として土地利用されており、攪乱が著しい。また、宅地部分については、盛土が施されていた。出土遺物は、縄文時代から現代に至る各時期の遺物が、混在して発見された。

基本層位第Ⅱ層；旧表土である。第Ⅰ層と同じくシルトで構成される層で、しまりがありやや堅い。全体的な色調は、黒色～黒褐色である。段丘面では、攪乱や削平等によって分布しない箇所が広汎に認められた。段丘崖には厚く堆積しており、最大で約 120 ㎝の層厚が確認された。遺物は含まない。

基本層位第Ⅲ層；地山である。黄褐色のシルト～粘土層が主体をなしている。ただし、地点によっては本層が分布せず、直接段丘礫層に移行している箇所も認められた。

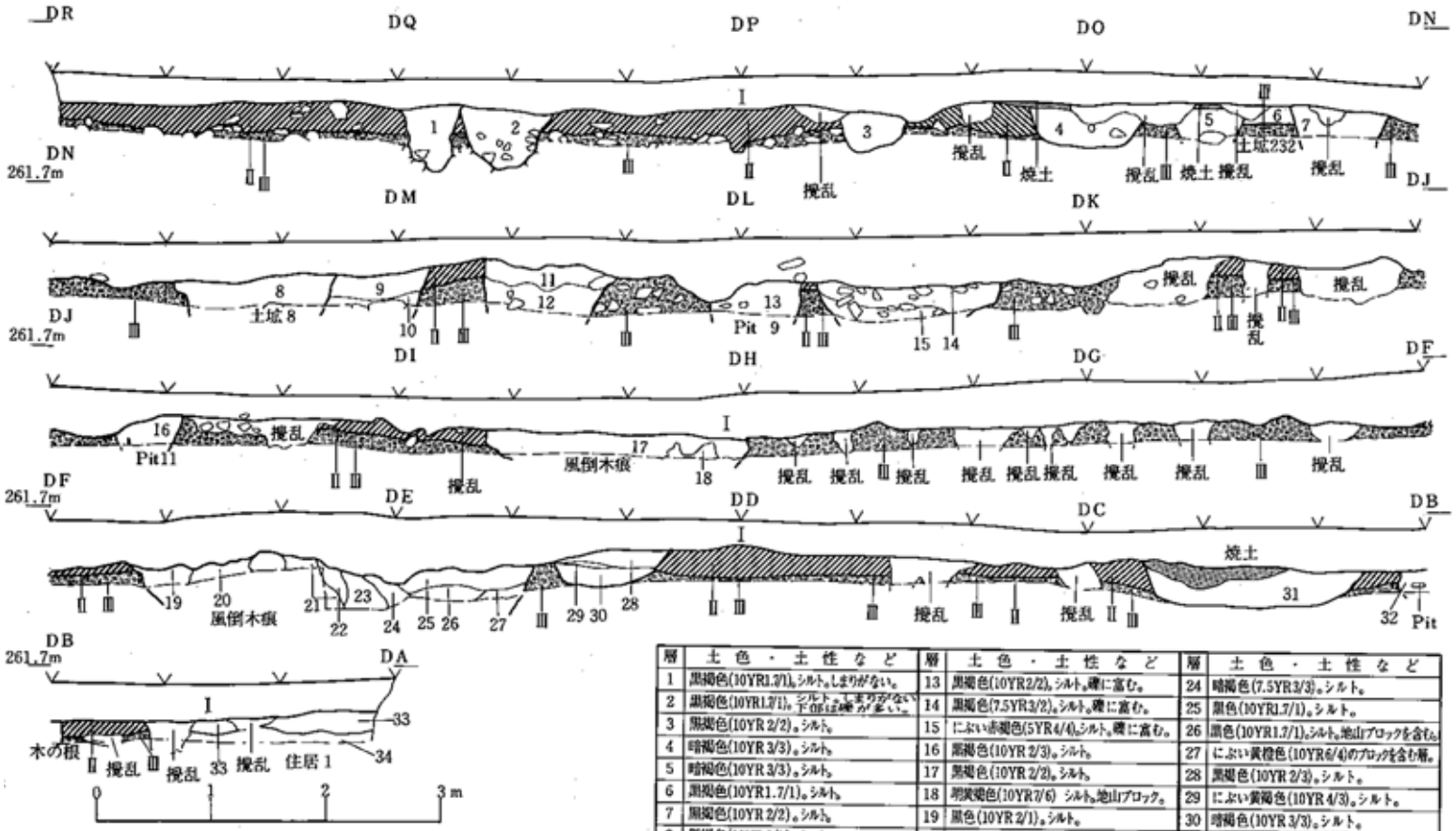



| 層 | 土色 | 土性など |
|---|---|---|
| 1 | ―― | 砕石による盛土。 |
| 2 | ―― | 川砂利による盛土。 |
| 3 | 黒褐色(10YR 2/3) | シルト。 |
| 4 | 黒褐色 | 遺物包含層。 |
| 5 | 黒褐色 | 旧表土。 |

| 層 | 土色 | 土性など |
|---|---|---|
| 1 | 黒褐色(10YR 2/3) | シルト。耕作土。 |

第５図　基本層位断面図(1)

D Ⅲ区84ライン（CJ ～EF）
D Ⅲ区DDライン（80～94）




| 層 | 土色 | 土性など |
|---|---|---|
| Ⅰ | 黒褐色(10YR 2/2) | シルト。耕作土。 |
| Ⅱ | 黒　色(10YR 1.7/1) | シルト。旧表土。しまりあり。 |
| Ⅲ | 明黄褐色～にぶい黄褐色 (10YR7/6～10YR4/3) | シルト～クレイ。地山。砂礫に富む部分や角礫に富む部分が斑状に分布 |

| 層 | 土色・土性など | 層 | 土色・土性など | 層 | 土色・土性など |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 黒褐色(10YR1.7/1)。シルト。しまりがない。 | 13 | 黒褐色(10YR2/2)。シルト。礫に富む。 | 24 | 暗褐色(7.5YR3/3)。シルト。 |
| 2 | 黒褐色(10YR1.7/1)。シルト。しまりがない。下位は礫が多い。 | 14 | 黒褐色(7.5YR3/2)。シルト。礫に富む。 | 25 | 黒色(10YR1.7/1)。シルト。 |
| 3 | 黒褐色(10YR 2/2)。シルト。 | 15 | にぶい赤褐色(5YR4/4)。シルト。礫に富む。 | 26 | 黒色(10YR1.7/1)。シルト。地山ブロックを含む。 |
| 4 | 暗褐色(10YR 3/3)。シルト。 | 16 | 黒褐色(10YR 2/3)。シルト。 | 27 | にぶい黄橙色(10YR6/4)のブロックを含む層。 |
| 5 | 暗褐色(10YR 3/3)。シルト。 | 17 | 黒褐色(10YR 2/2)。シルト。 | 28 | 黒褐色(10YR 2/3)。シルト。 |
| 6 | 黒褐色(10YR1.7/1)。シルト。 | 18 | 明黄褐色(10YR7/6) シルト。地山ブロック。 | 29 | にぶい黄褐色(10YR 4/3)。シルト。 |
| 7 | 黒褐色(10YR 2/2)。シルト。 | 19 | 黒色(10YR 2/1)。シルト。 | 30 | 暗褐色(10YR 3/3)。シルト。 |
| 8 | 黒褐色(10YR 3/1)。シルト。 | 20 | にぶい黄橙色(10YR6/4)。シルト。地山ブロック。 | 31 | 暗褐色(10YR 3/3)。シルト。 |
| 9 | 黒褐色(10YR 2/2)。シルト。しまりがない。 | 21 | にぶい黄橙色(10YR6/4)。のブロックを含む。 | 32 | 暗褐色(10YR 3/3)。シルト。 |
| 10 | 暗褐色(10YR3/3)。シルト。礫・木炭を含む。 | 22 | にぶい黄橙色(10YR6/3)。シルト。地山ブロック。 | 33 | 黒色(10YR 1.7/1)。シルト。 |
| 11 | 黒褐色(10YR 2/2)。シルト。 | 23 | 黒色(10YR 1.7/1)。シルト。 | 34 | 暗褐色(10YR 3/3)。シルト。 |
| 12 | 黒褐色(10YR2/2)。11より若干明るい土色。 | | | | |

第６図　基本層位断面図(2)

ＤⅢ区70ライン（DA～DR）

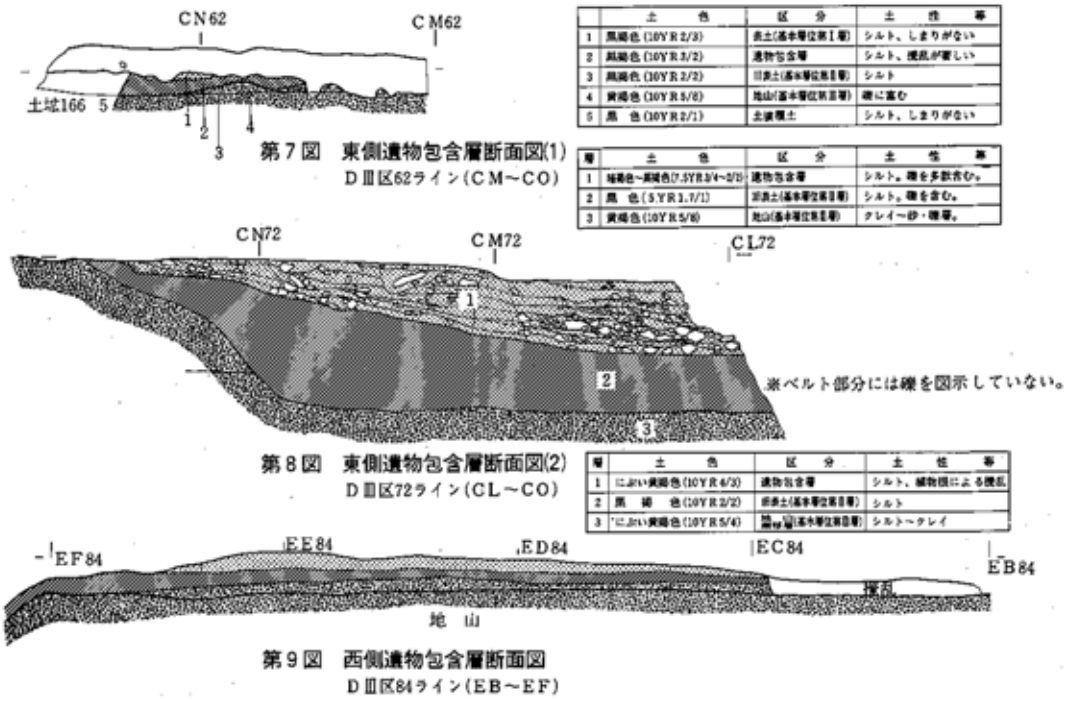
## ２．遺物包含層層位

遺物包含層は、基本層位第Ⅱ層上の遺跡東縁の段丘面から段丘崖部分と、西側の段丘面において発見された。東側遺物包含層は、CM61 区～CN61 区の 9 ㎡程の小規模な遺物包含層と、CM67 区からＣＯ～ＣＲ90 区に至る遺物包含層とに分けられる。

CM61 区～CN61 区の遺物包含層（第 7 図）は、1 枚で全般に表土からの攪乱が著しく、分層することはできなかった。最大層厚は約 10 ㎝である。層はシルトで構成され、色調は黒褐色を呈している。遺物の一部は、旧表土にくいこむようにして発見された。

CM67 区からＣＯ～ＣＲ90 区に至る遺物包含層（第 8 図）は、最大層厚約 120 ㎝、最も分層することができたＣＬ72 区では、10 枚を数えることができた。層はシルトで構成され、層中には、廃棄された礫を多量に含んでいる。層の全体的な色調は、暗褐色～黒褐色を呈している。遺物の出土状況は、いずれも層理面に沿って検出され、多量の人工遺物とともに、シカやイノシシなどの自然遺物（第Ⅶ章参照）も発見きれた。なお、遺物包含層の北部は国道 113 号線の旧道によって、東部は砂利採取施設によって、すでに削平されていた。また、遺物包含層の中央部には、白石川へ通じる道路によって削平され、残存状況としては南側と北側に分断されていた。以下に各層の状況（第 10 図）について、概略を述べる。

遺物包含層第Ｉ層；ａ～ｄに細分される。主として北側東縁に厚く堆積していた。層の色調は、黒褐色を基調としている。




| | 土色 | 区分 | 土性等 |
|---|---|---|---|
| 1 | 黒褐色 (10YR 2/3) | 表土(基本層位第Ⅰ層) | シルト、しまりがない |
| 2 | 黒褐色 (10YR 3/2) | 遺物包含層 | シルト、攪乱が著しい |
| 3 | 黒褐色 (10YR 2/2) | 旧表土(基本層位第Ⅱ層) | シルト |
| 4 | 黄褐色 (10YR 5/8) | 地山(基本層位第Ⅲ層) | 礫に富む |
| 5 | 黒　色 (10YR 2/1) | 土壌層土 | シルト、しまりがない |

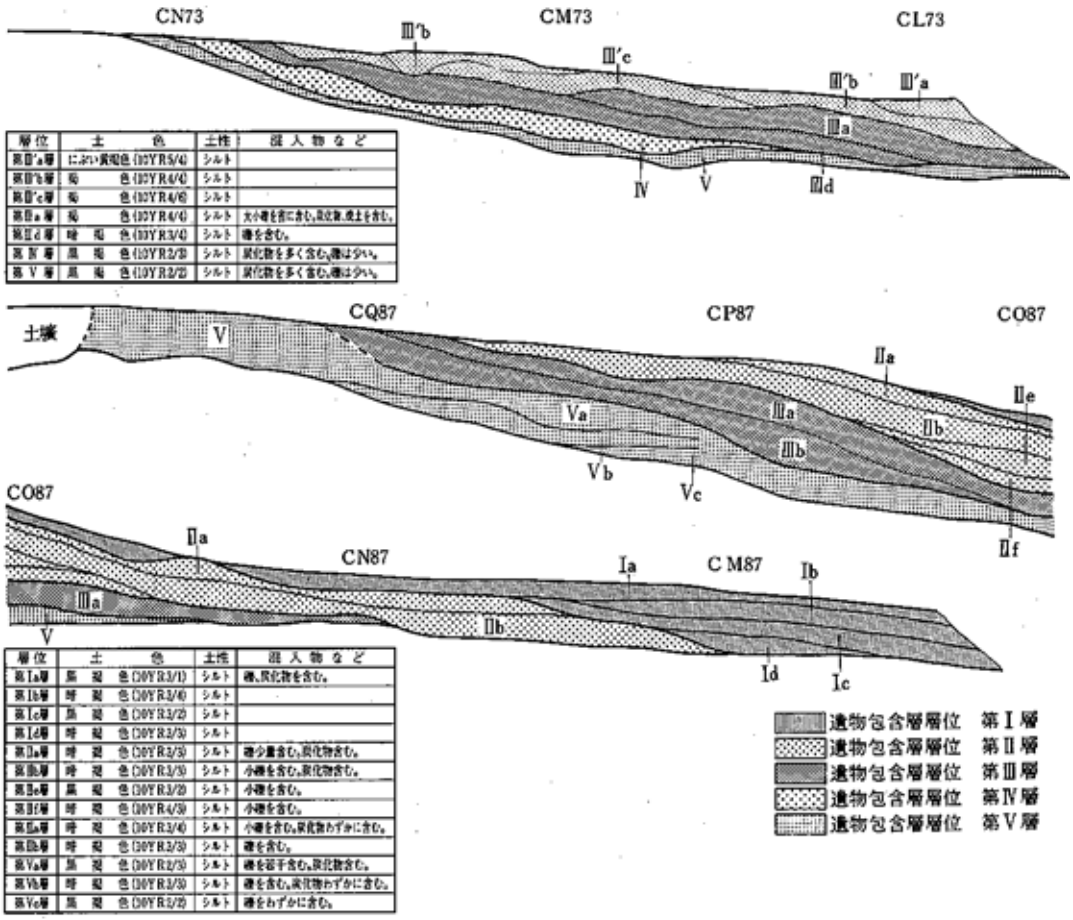
第７図　東側遺物包含層断面図(1)
Ｄ Ⅲ区62ライン（ＣＭ～ＣＯ）

| 層 | 土色 | 区分 | 土性等 |
|---|---|---|---|
| 1 | 暗褐色～黒褐色(7.5YR 3/4～2/1) | 遺物包含層 | シルト。礫を多数含む。 |
| 2 | 黒　色 (5YR 1.7/1) | 旧表土(基本層位第Ⅱ層) | シルト。礫を含む。 |
| 3 | 黄褐色 (10YR 5/8) | 地山(基本層位第Ⅲ層) | クレイ～砂・礫層。 |

第８図　東側遺物包含層断面図(2)
Ｄ Ⅲ区72ライン（ＣＬ～ＣＯ）

| 層 | 土色 | 区分 | 土性等 |
|---|---|---|---|
| 1 | にぶい黄褐色 (10YR 4/3) | 遺物包含層 | シルト、植物根による攪乱 |
| 2 | 黒　褐　色 (10YR 2/2) | 旧表土(基本層位第Ⅱ層) | シルト |
| 3 | にぶい黄褐色 (10YR 5/4) | 地山(基本層位第Ⅲ層) | シルト～クレイ |

第９図　西側遺物包含層断面図
Ｄ Ⅲ区84ライン（ＥＢ～ＥＦ）




第10図　東側遺物包含層層位断面図

遺物包含層第Ⅱ層；ａ～ｆに細分される。南側に薄く、北側に厚く堆積していた。層の色調は、暗褐色を基調としている。

遺物包含層第Ⅲ層；ａ～ｅに細分される。北側に薄く、南側に厚く堆積していた。層の色調は、黒褐色を基調とし、層中には廃棄された礫を最も緊密に含んでいる。

遺物包含層第Ⅳ層；南側で１枚確認されただけである。層の色調は、黒褐色である。

遺物包含層第Ⅴ層；ａ～ｃに細分される。南側に薄く、北側に厚く堆積していた。層の色調は、黒褐色を基調とし、やや粘性に富んでいる。

西側遺物包含層（第９図）は、ＥＡ～ＥＦ・82～86 区で発見された。最大層厚約 20 ㎝、色調はにぶい黄褐色である。遺物包含層は１枚で表土からの攪乱が著しく分層することはできなかった。遺物の一部は旧表土にくいこむようにして発見された。